

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

タイトル：「近世イスラーム国家と多元的社会」（平成24年度第2回研究会）

日時：平成24年10月27日（土曜日）午後2時より6時

場所：東京外国語大学・本郷サテライト 3F 会議室

## 1. 真下裕之（AA 研共同研究員・神戸大学）

「17世紀初頭デカン地方のペルシア語史書 *Tadhkirat al-Muluk* について」

15世紀から17世紀にかけての環インド洋世界においては、イラン高原由来の(1) テュルク人軍人と、(2) 学識者、文人、商人、政治家など多面的なプロフィールを備えた人々が、各地のイスラーム諸社会の重要な担い手として活躍していた。インド南部のデカン地方におけるイスラーム社会の展開もその例外ではない。本研究が対象とするペルシア語史書 *Tadhkirat al-Muluk* (17世紀初頭成立) の著者 *Rafi` al-Din Shirazi* は、上記の(2) の類型に該当するイラン出身者であり、南アジア各地を商用で遍歴した後、デカン地方のシーア派王朝アーディル・シャーヒー朝に奉職する中で、この史書を著した。本書にはクロノロジーには不確かな部分があるため、その所伝に絶対の信頼を置くことはできないが、同じくアーディル・シャーヒー朝で著された『フィリシュタ史』などの並行する同時代史料には見られない、一次的情報が大量に含まれている点で史料価値はきわめて高い。また著者自身の見聞にもとづくエピソード群は、当時のデカンや北インドにおける社会史上の資料としても読み取ることのできる、生氣ある描写に溢れている。さらに同書はデカン地方のムスリム諸王朝史を主たる内容としながらも、おそらくは著者自身の体験と伝聞をもとにしながら、同時代の北インドやイランの歴史についても相当の分量を割いている。本書のこの特性が上記のような著者のプロフィールに起因していることを考えると、本書は、17世紀環インド洋世界におけるイラン由来の人々の卓越という環境の中ではじめて生み出され得た著作であると考えられる。このような高い史料価値を備えた史書は残念ながら今なお完全な校訂が行われていない。そのため報告者は、現存する本書の手写本11点について網羅的な調査を行った。その結果、サーラル・ジャング博物館（インド・ハイデラーバード）所蔵の写本が本書の原型に最も近く、本文再建の底本とすべき写本であること、K. R. カマ東洋研究所（インド・ムンバイ）所蔵の写本がこれに対して有意の異読を含む、対校の価値を有する写本であること、ボドリーアン図書館（オクスフォード・英国）所蔵の写本が、サーラル・ジャング博物館本にかなり劣るものの対校の価値を有する異読を含む写本であることの知見を得た。報告者は目下、上記の3写本をもとにした批判校訂本の作成に従事しているところである。

## 2. 小笠原弘幸 (AA 研共同研究員・政治経済研究所)

「近代オスマン帝国における歴史教育の実相―その近世性にもふれて―」

本報告では、タンズィマート期 (1839-1876 年) からアブデュルハミト二世の専制期 (1876-1908 年) を中心とした時代におけるオスマン帝国の歴史教育のあり方と、そこで用いられた歴史教科書の性格を検討した。一般に歴史教育は、近代国家における国民意識育成に重要な役割を担うとされるが、オスマン帝国史研究において歴史教育の分析はほとんどなされていない。本研究はその欠を埋めると同時に、オスマン帝国近代史に新しい視点を提供することを試みた。

中心的に用いた史料は、教育関係の公文書と当時の教科書である。トルコ共和国の首相府オスマン古文書館に所蔵される教育省関連の文書群は、2007 年より公開が始まった。公開が比較的近年であるために、本史料は先行研究においていまだ十分に扱われていない。本報告はこの文書史料を利用することで、歴史教科書運用の実態開明を試みた。また教科書は、歴史書としては「史料的価値」がないものとされ、研究機関において収集の対象となつてこなかった。そのため先行研究においては、参照しやすい有名な作品のみが分析対象となつていた。これに対し本研究では、網羅的な史料収集に努めようとして、包括的なテキスト間の比較を試みた。

本研究の結論は次の通りである。タンズィマート期には西洋を範にした近代的教育システムがオスマン帝国に導入され、伝統的なマドラサでは教育科目に含まれていなかった歴史が、近代的学校において教授されるようになった。しかし同時代の公文書を検討すると、歴史教育の導入を一面的な近代化・西洋化として捉える事が難しいことが分かる。というのも教科書として新たに書き下ろされた史書だけではなく、前近代に著された伝統的な史書も、教科書として広く利用されていたからである。さらに教科書の内容を比較すると、「古典的な史書」が「新しい歴史教科書」に与えた影響が指摘できる。オスマン帝国における「近代的」歴史教育は、多分に伝統的な歴史叙述の影響を受けていたのである。続くアブデュルハミト二世期は検閲が強化された時代であったが、教科書の出版点数は増加している。歴史教科書は、君主や政府の意向に沿うようコントロールされつつ発展していったのである。この時代に著された歴史教科書には、愛国心や同胞意識の鼓舞といった要素が欠けているのも特徴的である。一般的な「国民史」に想定される要素を欠くこの時代の歴史教科書は、「近代的王朝史」と言うべき性格を持っていたと位置づけることができよう。